

第1回

ものづくりと質的研究 研究会

ラトゥール以降のタルド・ ルネッサンスについて —モノ、心理、技術

2021年6月15日(火)
21:00 開始

司会 サトウタツヤ(総合心理学部 教授)

講師 中倉 智徳

(千葉商科大学人間社会学部 准教授)

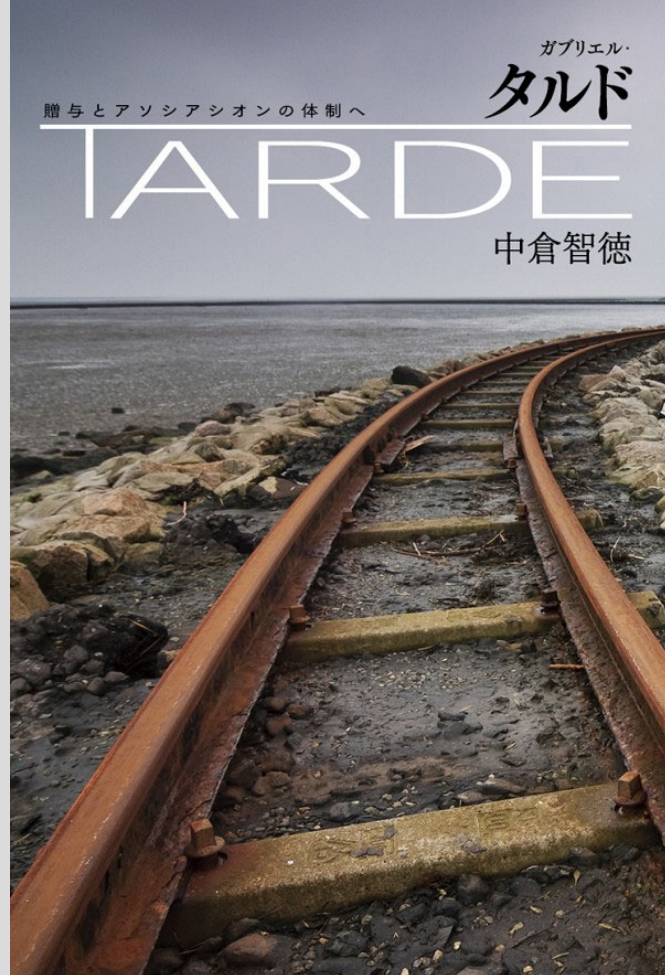
指定質問 川野 健治(総合心理学部 教授)

社会模倣説で知られる19世紀末に活躍したガブリエル・タルドは、ジル・ドゥルーズの再評価以降、その差異の哲学を中心として再び注目されてきた。

この「タルド・ルネッサンス」は、ブリュノ・ラトゥールを経由して、2010年代以降では社会科学において広まりつつある。そこではなにが起こっているのか。

ラトゥールはタルドをアクターネットワークセオリー(ANT)の先駆といい、その際にはモノへの注目が論じられる。他方で、ラトゥールは、レピネとの著作『情念の経済学——ガブリエル・タルド経済心理学入門』(人文書院、中倉智徳訳、2021年)において、心理的なものの数量化こそが経済学において重要であること、SNS上でのビッグデータのように、質・量的なデータの増大と技術革新によって、心理的なものが数量化可能になったと論じてもいる。

本報告では、ラトゥール以降のタルド・ルネッサンスにおいて、モノ、心理、技術がどのような関係にあるのかを考えていきたい。



タルド

ブリュノ・ラトゥール、ヴァンサン・A・レピネ 著
Bruno Latour, Vincent Antonin Lépinay

中倉智徳 訳
Tomonori Nakakura

経済心理学入門

L'économie, science des intérêts passionnés :
Introduction à l'anthropologie économique de Gabriel Tarde

情念の経済学

全く新しい経済学の思想
アクターネットワークセオリーの原点

19世紀フランスの社会学者ガブリエル・タルドが記した大著『経済心理学』(1902年)は、近代経済学の可能性を徹底的に押し広げようとし、ついには全く異なる独自の体系を持つ経済学の発明に至った傑出した著作である。著者によれば、その重要性はマルクスに匹敵し、部分的な思想はケインズやシュンペーターの先駆けでもある。さらに、近年の金融社会論や市場の人類学において語られるように、金融においてこそ、数値化と心理学化が結びついていることを主張する。まさに現代に読まれるべき書物でもある。いまだ知られざるその革新的な思想の魅力を、「タルドの弟子」を自称するラトゥールが伝える一冊。

人文書院

参加方法 下記URLよりご申請ください。

<https://ritsumeai-ac-jp.zoom.us/j/96059659450?pwd=b2tVblo1UU1KT2pZM3dDNzR1Vm9SQTO9>

共催: 立命館大学 ものづくり質的研究センター

立命館グローバル・イノベーション研究機構

「センサ・マイクロマシンがつなぐ革新的CPSモデルの医療健康分野への展開」拠点

立命館大学 生存学研究所

R
RITSUMEIKAN
UNIVERSITY